

## 第32回学術年会でのアンケート結果 学術・編集委員会

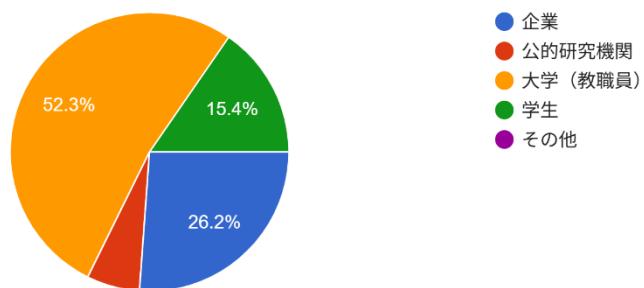
去る2025年9月4日から5日に岐阜市文化センターにて開催された学術年会について、参加者の皆様にGoogleフォームによるアンケートを行い65件の回答を頂きました。お忙しい中、アンケートにご協力頂きありがとうございました。アンケート結果をまとめましたので御報告申し上げます。

### 総評

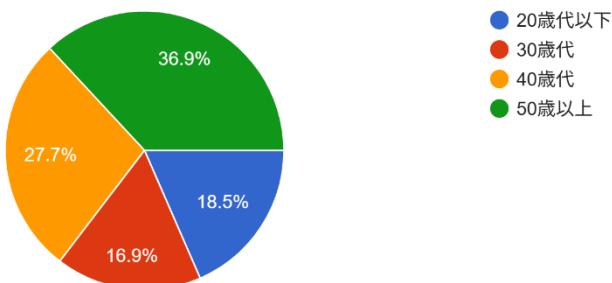
- 第32回学術年会に対する総評は80%以上の回答者が★3つとしており、概ね好評であったことがわかります。興味を持った講演では特別講演1（國澤先生）が第1位でした。学生・若手セッションが第2位であり、学生・若手研究者の活気が感じられたとのご意見も寄せられました。本学会が今後さらに発展・継続していくためには若手研究者による活発な活動が重要であり、非常に良い傾向にあると思います。これに関連して、初年度年会費無料制度の拡充などにより、学生会員の経済的負担の軽減を求めるご意見も寄せられました。
- 発表時間や口演とポスターの比率は「ちょうど良い」とするご回答が多かったのですが、質疑時間が短かったとのご意見も寄せられました。学術年会の第一の目的は研究発表と議論です。会期や会場など難しい問題も多いですが、次回以降の学術年会で改善すべきポイントと考えます。
- 学術年会の内容は概ね好評でしたが、企業研究者や臨床医からの発表を求めるご意見も寄せられました。学会員の所属が大学、企業、公的研究機関、行政と多岐にわたるのが本学会の特色の一つです。多様な所属背景を持つ会員の皆様に魅力ある学会となるよう、多くの方々にご意見をお寄せいただければと思います。

### 1. ご所属、年代、参加条件（会員 or 非会員として）について

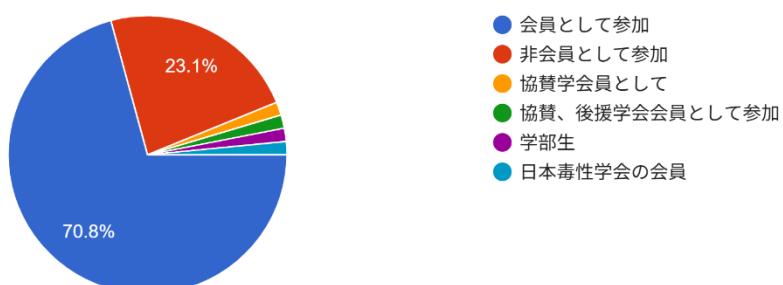
#### 1) ご所属について



## 2) ご年代について



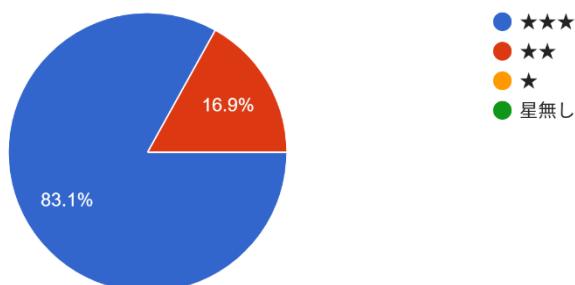
## 3) 参加条件について



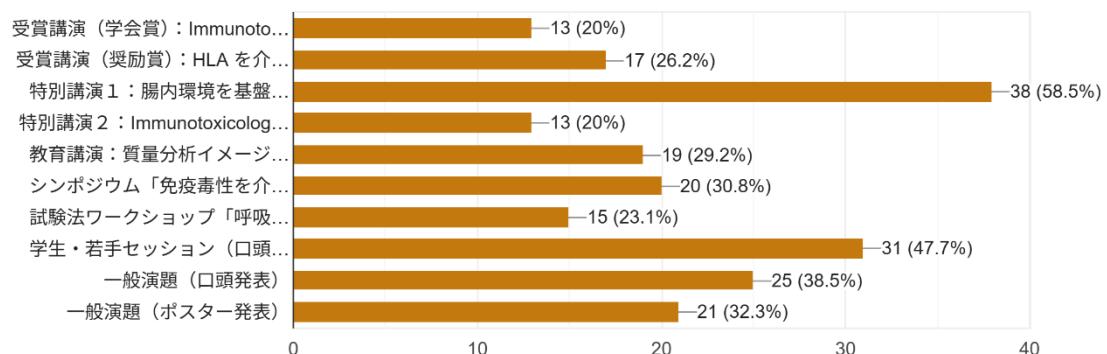
## 2. 日本免疫毒性学会学術大会について

1) 今回（第32回、2025年）の学術年会について伺います。

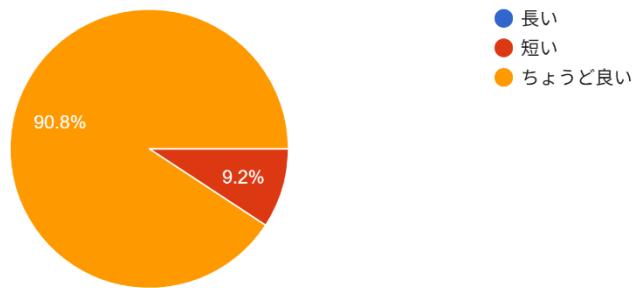
① 総評はいかがだったでしょうか？



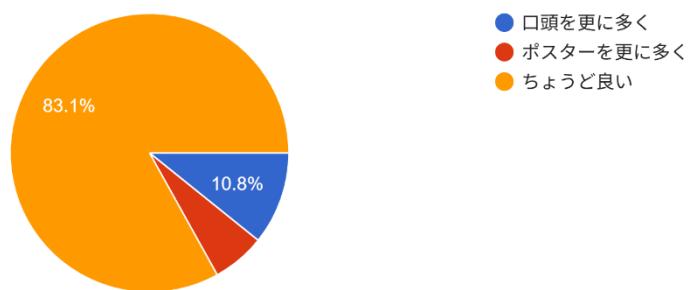
②-a 興味を持たれた講演やセッションはどれでしょうか？



③ 発表時間はいかがでしたか？



④ 口頭とポスターの比率（バランス）はどうでしたか？

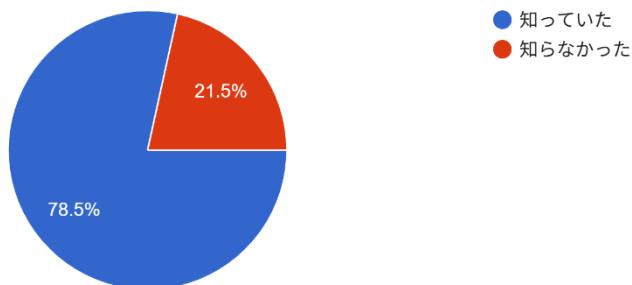


⑤ その他ご感想等ありましたら御願いします。

- 「トピックのバリエーションが豊富で勉強になった（同様のご意見が4件）」など好意的な意見が寄せられました。その一方、「企業からの発表が少なかった」、「免疫生物学というより一般的な免疫学と思われる発表内容もあった」など、検討課題とすべきご意見も寄せられました。
- 「一般口演の質疑時間が短かった（同様のご意見が3件）」、「ポスター会場が混雑し、討論時間が少なかった（同様のご意見が3件）」などのご意見が寄せられました。
- 「学生・若手の発表が多く、活気が感じられた（同様のご意見が4件）」、「学生・若手の口演時間も一般口演と同様にしてはどうか」、「ポスター発表者にもフラッシュトークの様な機会があつても良いのでは」など、学生を含む若手研究者による口演機会に好意的なご意見が寄せられました。

2) 入会初年度年会費無料制度、Web学会のあり方、次回以降の学術大会について、テーマなど

①-a 「非会員の入会初年度年会費無料制度」についてご存じでしょうか？



①-b 「非会員の入会初年度年会費無料制度」について要望はありますか？



② 学術年会 Web 開催の今後のあり方について、今後取り上げてほしいテーマ、若手セッションのあり方、バナー広告主からの情報（事務局送信メール文末の JSIT BLINC News）への興味、その他ご意見等ありましたらご記入下さい。

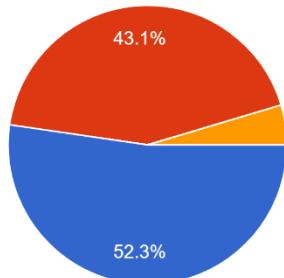
- 「Web 開催、Web 聴講により宿泊出張が不要になり、急な予定変更にも対応でき、参加者増にもつながるのでは」といったご意見が寄せられました。
- 学術年会で取り上げてほしいテーマについて、「アレルギー接触皮膚炎、皮膚感作性」「免疫原性試験」、「医薬品の免疫原性予測」、「サイトカインリリース試験の事例」など具体的なテーマに加えて、「研究の視野が広がりそうな異分野のトピック」に対する要望も寄せられました。

3. 日本免疫毒性学会の今後の活動や方向性等について、ご意見やご提案等ありましたら、ご記入ください。

- 「企業研究者に魅力のある学会にしてほしい（同様のご意見が 3 件）」、「臨床を診ている方にも参加してほしい」とのご意見が寄せられました。
- 「複数の企業と CRO で、国内でギャップと考えられる免疫毒性に関連する試験法のバリデーション (hypersensitivity のような immunostimulation) に取り組めるような協力体制を築く場を積極的に提供して欲しい」とのご意見が寄せられました。

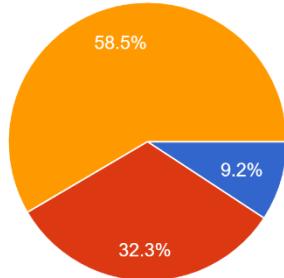
- 「学生、若手研究者の入会を促す取り組みを進めてほしい（同様のご意見が 5 件）」といったご意見が寄せられました。学生年会費の減額、初年度年会費無料制度の拡充など、具体的な対応策も寄せられました。
4. ImmunoTox Letter (6 月と 12 月の年に 2 回発行している学会誌；日本版と英語版があり、それぞれの pdf 版を学会 HP に掲載中) について、ご意見、ご提案等ありましたらご記入ください。
- プロトコルに関しては、共有できる場合とできない場合があるかもしれません。広く公開して、海外の研究者にも引用してもらえるようであれば、素晴らしいと思われますが、知財に近い場合は二の足を踏むかもしれません。

1) 免疫毒性実験プロトコルが有るとすれば、どのような形式で共有されることを希望しますか？



- ImmunoTox Letter (または学会HP) に実験プロトコル本文を掲載し、会員・非会員の区別無く広く研究者が閲覧できる形式で共有してほしい。
- ImmunoTox Letter (または学会HP) には概要のみ掲載し、実験プロトコル本文は、会員のみが閲覧できる形式で共有してほしい。
- 特に免疫毒性実験プロトコルの情報共有を必要としていない。

2) 免疫毒性実験プロトコルが有るとすれば、何らかの実験プロトコルを提供できますか？



- はい、できます。
- いいえ、できません。
- わかりません。